

絶対に笑ってはいけな  
いホロライブ24時！  
feat. バーチャル  
YouTuber 2020

CHRONOM

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ホロライブに所属する5人のV t u b e r

事務所に呼び出された彼女たちに待っていたのは24時間何があっても笑ってはいけないという恐怖のゲーム！

彼女たちは24時間襲い掛かる笑いの刺客たちの猛攻に耐えることは出来るのか!?

# 目次

絶対には笑ってはいけない物語の始まり	1
絶対には笑ってはいけない移動時間の序章	8
絶対には笑ってはいけない移動に安寧はな	19
い	19
絶対には笑ってはいけない合宿所への到着	34
絶対には笑ってはいけない引き出しの恐怖	44
絶対笑ってはいけない悪魔に天使は微笑	63
む	63
絶対には笑ってはいけないオーディション	77
絶対には笑ってはいけない舞台の主	89
絶対には笑ってはいけないランチタイム	98
絶対には笑ってはいけない待ち伏せ	109
絶対には笑ってはいけない恐怖の再来	117
絶対には笑ってはいけないボタン	131
絶対には笑ってはいけない館内放送	143

絶対には笑ってはいけない説明会	154
絶対には笑ってはいけない笑い袋	162
絶対には笑ってはいけない中で起きた小さな事件	173
絶対には驚いてはいけない肝試しの始まり	188
絶対には笑ってはいけない時間で芽生えた何か	195
絶対には驚いてはいけないマーケティングポイント	203
絶対には笑ってはいけない物語の終章	209

# 絶対に笑ってはいけない物語の始まり

某日 早朝 5:45

ホロライブに所属する5人のV t u b e rはその日ホロライブの事務所へと集められた

「えつと…先輩たち何か聞いてますか？」

「トワちゃんも何も聞いてないの？ シオンもなんだよねー」

「も…：ペコーらARKやつてる途中だったよ…」

「しっかし…なんとも統一性のないメンバーツスねえ…」

「うーん、まあ今から説明あるだろうし…」

集められたのは

常闇トワ

紫咲シオン

兎田ぺこら

大空スバル

大神ミオの5人

彼女を呼び出したのは

??? 「はーはっはっは!」

ミオ 「いやなにやってんの、フブキ…」

同じホロライブ所属の白上フブキだった。

彼女は仮面をつけスーツを着ていた。

フブキ 「フツフツフ、今の私は白上フブキではない!」

「(「いや、バレバレだろ…」)(「」)

フブキ 「今日みんなを呼び出したのは他にもない、君たちには今から24時間とある  
企画に挑戦してもらおう!それは

絶対に笑ってはいけないホロライブだ!」

5人は顔を見合わせて呆然とする

トワ「えっ…それってガk「トワちゃんダメ！わかっててもその先はダメ！」むぐぐ！」

トワがしやべるのをミオが口をふさいで阻止する  
なんでかは知らないが

ぺこら「えー…なんぺこかその企画…」

ミオ「いやな予感しかしないんだけど…」

シオン「24時間笑わないって…」

各々思うところあって言葉にするがフブキは続ける

フブキ「君たちにはバーチャルアイドルとして一歩成長するために笑いの刺客たちの攻撃に24時間たえていただきます！」

トワ「いやいやいや！アイドルなのになんで笑い!？」

シオン「全然繋がり見えないんだけど！」

フブキ「とーにーかーく！ルールを説明します！」

1. 24時間バーチャルアイドルとして生活し、研修を受ける
2. ゲーム開始後、どんなことがあっても絶対に笑ってはならない
3. 笑った場合はその場できついお仕置きを執行します

フブキ「以上がルールだ！簡単だろう!？」

シオン「色々ツツコミたいけどこれももう決まったことなんでしょ…?」

スバル「スバル達アイドルのはずなのになんでバーチャルアイドルの研修を…」

トワ「おしおき…いつたい何されるの…」

覚悟を決めた

というわけではないが、せっかく持つてきてくれた企画

5人は渋々了承した。

ホロライブ事務所前

フブキ「これが今日みんなの移動に使う歩露蕾舞号だ！」

そこにはデカデカとホロライブのロゴと



大量のYAGOOのプリントされたシャトルバスがあった

「「「いや、だっさ!!!」」」

フブキ「さあ、乗り込んだその瞬間ゲームスタートだ！乗り込むがいい！」

トワ「えつと…スバルちゃんどうぞ…」

スバル「いやいや、ここはぺこらちゃんがお先どうぞツス…」

ぺこら「ここはミオ先輩に譲るぺこ…」

ミオ「えっ!?!ウチ!?!」

ミオに全員の視線が集まる

もう引き返すことは出来そうにない。

ミオはため息をつきながらバスへ一歩また一歩と足を進める。

そして、バスへと乗り込んだ。

ミオ「えつと、これでいいの？」

「「「……………」」」

だがなぜかほかのメンバーは乗ってこない

ミオ「……………」

ミオは全員を見回す、そして

ミオ「…ブツｗｗｗｗｗｗｗｗ」

笑いをこらえることが出来なかった

デデーン

大神OUT！

どこからともなく謎の効果音とYAGOOの声が聞こえてきて、

??? 「HEY！ミオパイセン！」

謎の棒を持った桐生ココが登場し、

バスの中へと乗り込んでいく。

ミオ「え？ココ会長？え、なに？なんで私にお尻突き出させるの!?!その手に持つてるのなに!?!」

するとココは棒を振りかぶり

ココ「罰執行！FOOOOOOOOO！」

スパーン！

思いつきりケツバツトした

ミオ「いったあああああああああああああああああああ  
!!!」

ココ「また来るですよー！」

ココは役目を終えると颯爽と退場していく。

「なるほど、こうなるのか」

ミオ「お前らー！ウチで試したなー!?!」

フブキ「まあまあ、じゃあ次の目的地向かうからみんな乗りこんでね」

こうして

24時間のゲームが始まった

この先彼女たちの前に待ち受ける笑いの刺客の恐怖を  
彼女たちはまだ知らない

# 絶対に笑ってはいけない移動時間の序章

同日 6 : 4 5

6人に乗せた歩露蕾舞号は発車し移動を始めていた。  
彼女たちはミオが開幕で罰ゲームを受けたこともあり、  
まずは様子見なのかお互いに動かずにいた。

「「「「「」」」」」

フブキ「ふっふっふっ…みんなして黙り込んじゃって、これは最初の刺客の投入だね！」

フブキが端末でメッセージを送る

すると、バスは近くのバス停で停車する。

ぺこら「あれ？ここただのバス停じゃないぺこか？」

スバル「いや…これっていやな予感しかないんすけど…」

プー♪

バスのドアの開放音が鳴り

2人組がバスへと乗り込む

乗り込んできたのは

特攻服を着た夏色まつりと姫森ルーナ

「「「「ぶつつうwwwwwwww」」」」

デデーン

全員OUT!

シオン「いやwwwwおかしいでしょwwwwww」

スバル「まつり先輩wwwwなにしてるスカwwww」

トワ「ルナちゃんwwwwちよつwwwwぶつつwwwwww」

桐生ココがケツバツト用の棒を持って現れ

ココ「全員罰執行じゃああああ!」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

全員の尻をぶっ叩いていく

シオン「いった!?会長!もつと手加減しなよ!」

ぺこら「これあと20時間以上続くぺこか…」

5人が痛みをこらえる間にヤンキー2人のやり取りが始まる

まつり「ルーナの姉御、最近あいつらマジ生意気じゃないすか?」

ルーナ「…」

まつり「いやマジあいつら一回しばいちゃいましょうぜ姉御〜？」  
ルーナ「…（チラッ）」

まつりから何を問いかけられても微動だにしないルーナがチラッとトワのほうに視線を向ける

すると

トワ「ぶっwww」

デーン

常闇OUT！

なぜかトワが噴出した

シオン「えwwwなんでwww」

デーン

紫咲OUT！

それにつられ、シオンも笑ってしまう

スパーン！スパーン！

トワ「違うの…乗ってきたときのインパクト思い出しちゃって…」

シオン「うう…とぼっちりだ…」

間が戻ったところでまつりは続ける

まつり「ちよつと姉御〜！聞いてます〜!?最近生意気なんすよ〜！アキロゼの野郎が〜」

ルーナ「んな？あのち〇ち〇かためのやつかのら？」

「「「「「w w w w w w w w w w」」」」

デブーン

全員OUT！

普段のルーナからは想像もつかないセリフが飛び出したことに全員笑いをこらえきれない

進行役のフブキすら笑いをこらえられないほどのインパクトがそこにはあった

ミオ「いや！これは卑怯だろ!!」

トワ「ルーナちゃんに何言わせてんのw w w」

スバル「これ放送できるんすか!?!」

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！



全員がお尻をさすりながら着席するとやり取りが再開

まつり「あと生意気なのはあれですかね〜！角巻のため！」

ルーナ「んな？クソ雑魚回線卒業したらアイデンティティがなくなった羊のこのら  
か？」

トワ「んひいwww」

デーン

常闇OUT！

トワ「いやw違うw思っていないwww思っていないからね、わたちゃんwww」

トワはツボって立ち上がれなくなるが、ココが立ち上がりさせ容赦なくケツバツトでし  
ばく

スパーン！

スバル「しかし企画のためとはいえルーナちゃん容赦ないっすね…」

ミオ「ルーナちゃんりの演技プランなのかもしれないけど結構えぐいところ来るね  
…」

まつりとルーナの攻撃は止まらない



ルーナ「明太子…」

トワ「ヌフツｗｗｗｗ」

スバル「ンフフフフｗｗｗｗｗｗ」

デブーン

常闇、大空OUT!

ミオ「いや！ためるだけためてそれかい！」

スバル「なんでwなんで明太子w w w」

スパーン！スパーン！

まつり「おめーらよお！あんま姉御をなめんじゃねえぞ!？」

ルーナ「おめーらルーナをなめてるのらかあ？」

まつり「あんま姉御なめってつとなあ！

ちゅぶすぞ？」

「「「「「…」」」」」

ルーナ「…」

謎の静寂が訪れ

ルーナ「ルーナのまねですべてってんじやねーのらあ！」

まつり「すみません！ほんとすみません！」

ぺこら・スバル・ミオ「「w w w w w w」」

デデー

兎田、大空、大神OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！

ルーナ「興が冷めたから、けるのら」

まつり「あ、姉御！おめえらおぼえとけよー！」

そう言い残し、2人は下車していった

プー♪

ドアが閉まり、バスは再び動き出す。

トワ「いやあ…トツプバッターから飛ばしてましたね…」

シオン「会長も容赦なく叩いてくるから思ってたよりきついね…」

スバル「もー！まつり先輩もルーナちゃんも卑怯つすよ！」

ぺこら「ルーナちゃんにあんなセリフ言わせてあとでルーナイトに怒られないペこ

かあ…？」

ミオ「ううう…なんかウチ…耐えられる自信なくなってきた…」

フブキ「いやーw笑った笑ったw、でもねみんなこれは序章に過ぎないんだよ？」

バスは目的地へ向け、

再び走り出した。

絶対に笑ってはいけない移動に安寧はない

同日 7 : 15

最初の刺客の襲撃から若干落ち着きを取り戻したメンバーたち  
そんなとき、フブキがアナウンスする。

フブキ「はいはい、次のバス停過ぎたら目的地だよ」

ミオ「次のバス停過ぎたら…ねえ…」

ぺこら「そのバス停が嫌な予感しかないぺこ…」

フブキ「ふっふっふっ♪わかってらっしやるっ♪」

次のバス停が近づくと  
バスは減速し、停車した。

【【【次はだれがくるんだ…】】】】

全員がゴクリと唾をのむ

プー♪

ドアが開き  
誰かがバスへと乗り込む  
乗り込んだできたのは





スパーン!

トワ「え?なに?スバルちゃんどうしたの?」

スバル「そういうことかあ!ホロライブ!!!」

トワはいまいち状況が呑み込めないが他のメンバーは口角がひくついている

何かを察知したかのように

舞元「えー今回ですね、Twitterでいやだいやだと言っていたペヤング激辛M  
AXENDをですね、あろうことか、早食い勝負という形でたべさせていただくこと  
になりましたハッシュタグがリップ欄にめちやくちや来る男舞元啓介ですよろしくお願  
いいたします。」

シオン・ミオ「ブフツWWW」

スバル「おじwおじい!w」

デデー

紫咲、大空、大神OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!

スバル「わかったっス…これって…

舞スバの初回コラボのやり取りっす…」

そう、この状況は舞元とスバルが初めてコラボした配信の再現なのである

トワ「でもさ、スバルちゃんはここにいるよね？」

シオン「つてことは…スバル役が本命の刺客か…」

舞元は構わず進行する

舞元「さっそくね、今回の対決の主犯をお呼びしたいと思います、よろしくお願いいたします3000のスタンドを持つバーチャルYouTuberホロライブ2期生の大空スバルちゃんです！よろしくお願いいたします！」

するとバスの外から

??? 「ちわーっす！大空スバルっす〜！ちわーっす！」

大空スバルのコスプレをした百鬼あやめが乗り込んできた

「「「「ぶつｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」」」」

デデーン

全員OUT!

ミオ「あやめちゃんｗｗｗｗ」

シオン「くっそｗｗｗｗ」

ぺこら「こんなんむりぺこｗｗｗｗ」

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

あやめ「いや～緊張する～！帰りたいよおじおじ～！」

スバル「あやめちゃんなんで受けたんスカ～！」

スバルは心の中で叫ぶが舞元とあやめはやり取りを続ける

舞元「今回その…戦うにあたって、スタンドを連れて来たいっていうのも私存じてお  
ります」

あやめ「そうっす！連れてきたっすによ」

あっ、かんだ

全員が笑いをこらえる

舞元「ぼふっｗｗ」

そんな中舞元は嘖き出すが続けるようにあやめに促す  
あやめ「おっほん…、そうっす！連れてきちやつ…！」

あ、また囁んだ

舞元が笑うのをこらえながら悶える

が、あやめはなおも続ける

あやめ「連れてきたツス…連れてきたツス…よし！

そうっす！ちゆれて…！」

連れて来たぞ人間様…！」

あやめが真顔ですのまましやべると

舞元「ハツハツｗｗｗｗｗｗ」

「「「「ぶぶぶ……」」」」

思わず5人だけでなく相手役の舞元まで嘖き出した

デデーン

全員OUT!

スバル「それはずるいつスよ!あやめちゃん!」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

スバル「くっそお…」

あやめ「いでよ!スバルのスタンダー!」

そういつて次にもり込んできたのは

城之内の画像を頭に付けたしぐれうい

スバル「かあちやああああああああん!?ｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「「「「ｗｗｗｗｗｗｗｗ」」」」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

ミオ「今度はういママまで…」

ぺこら「いや、待つぺこ…確か例の配信って…」

舞元「俺も、スタンド出していないすか?」

あやめ「いいっすよ!しょうがないっすね!」

【(一)【まずい…今度はだれが来る!】(二)】

全員がスタンド(新たな刺客が来ると身構える)

舞元「…」

あやめ「…」

バスの中は静寂に包まれる

舞元「…」

「「「「…」」」」

静寂が…

あやめ「おじおじはやく、そば乾いちやうよ〜」

舞元「そうだな、じゃあもう一人「「「「いやなんもないんかい!!!」」」」

ゲデー

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

刺客たちの容赦ない猛攻は続く

舞元「ルールと、あと審判が必要ということで、お呼びしています、白上フブキさんです!」

全員がえ?とフブキのほうを向く



がフブキは動かない  
すると

うい「はいよろしくお願いしまーす！絵面が凄い！」

ういママがフブキのものまねを始めた

スバル「かあちゃんwww」

デデーン

大空OUT！

スパーン！

スバル「なんスかあ！なんなんスかあ！このカオスはあ!？」

舞元「よーしwsバルいい感じにしばいてもらったし帰るかー！」

舞元はご機嫌に笑いながら下車しようとする

するとういママが

うい「おじおじさあ、さつきからめっちや笑ってない？」

舞元「は？」

うい「このバスに乗ったらさ、ゲーム始まつてるんだよ？フブキちゃん、お願いしま  
す」

「はいはい」

ゲデーン

舞元

タイキツク！



全員笑いをこらえられないなかでも罰ゲームは執行される

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

あやめ「んじゃ、余たちは帰るけどみんな頑張るんだぞくおつなきりく」

うい「じゃあねくスバルく」

ういママとあやめはバスから降りていくが舞元はまだ悶えている

スバル「おじおじく？大丈夫っスかく？」

舞元「くっそ…ういママめ…スバル！お前のせいだからな！ばーかばーか！」

スバル「うっせー！ばーかばーか！」

舞元はぐちぐちと文句を口にしながらバスを降りて行つた

プー♪

ドアが閉まり

バスは再び走り出す

スバル「おじおじい！ぎっけんなあ！」

シオン「くそお…あれはするいつしよ…」

ミオ「完全にスバルちゃんつぶしに来てたね…」

ぺこら「まあ少なくともバス移動での刺客は一旦止まるぺこ…」

トワ「ううう…トワ、この後耐えられるかな…」

「フブキ【いやー舞元さんへのドッキリも成功したし満足満足！さーて、次の刺客はつと…】」

バス移動は終わっても

地獄のような時間はまだまだ終わりそうにない

## 絶対に笑ってはいけない合宿所への到着

同日 8:00

バスはフブキのいう目的地へとたどり着いた

5人はバスを降り周りを見渡す

見る限りは普通の合宿所のようなものに見える。

ミオ「どこに連れてこられるんだろって思ってたけど…」

スバル「結構普通の合宿所っスね」

ぺこら「油断しているとまた刺客に不意つかれるぺこだよ」

フブキ「はいはい、みんなくまはこつち来て〜」

フブキの案内で5人は合宿所の玄関前に集合する

フブキ「皆さんこちらをご覧ください、こちらにございますはこの合宿所の守り神である

ヘルシエイクYAGOOの像です」

「「「「ぶっ！WWWWWW」」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

シオン「ぐう…こんなシンプルな罠に…」

フブキ「はいはい、みんなヘルシエイクYAGOO像にしっかり手を合わせておいてね」

フブキに言われるままに全員しっかり手を合わせていく  
すると

???「ヘルシエイクYAGOO…」

ミオ「んフツw」

デデーン

大神OUT！

不意打ちの棒読みボイスでじわってしまったミオにケツバットがくり出される  
スパーン！

ミオ「いてて…油断した…」

フブキ「じゃあ今からこの合宿所を案内するからみんなついてきてね」  
トワ「いつになったら落ち着ける場所に行けるんだろ…」

フブキに案内され最初に案内されたのは中庭  
合宿所の規模もあり立派な中庭だ  
だが5人の目には中庭には見慣れないものがあつた



シオン「ん…？なにあれ？檻？」

ミオ「…もうすでに嫌な予感が…」

近づくに連れて見える

見覚えのある後ろ姿

完全にそれを認識する前にフブキが話始める

フブキ「あーあれね、あれはね希少生物

しけゴリラのメス、みこちゃんだよ」

みこ「シケテンネエ！」

「「「「ぶっふおwwwwww」」」」

デデー

全員OUT！

ミオ「みこちゃんwww」

ぺこら「みこ先輩なにやってるぺこwww」

トワ「やばいwww腹筋がwwwつるwww」

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

フブキ「しげゴリラのメスは本当に希少なんだよ」

ぺこら「にしても…よくOKだったぺこね…みこ先輩…」

シオン「屋外で檻の中で放置なんて…」

2人が哀れんだ目で見つめると

みこはこつちに目を向け

みこ「みーこち！みこち！希少種監禁！みーこちみこち！希少種監禁！」

「「「「「wwwwwwwwwwwwwww」」」」」

デデーン

全員OUT!

突然のコール（自演）に全員笑いを抑えることが出来ない

トワ「でも、屋外ですつと待ってるって退屈しません？」

フブキ「あ、その点に関しては問題ないよ、ほら」

そういつてフブキの指さす先、しげゴリラの檻の奥を見ると

ゲーミングPCとモニターが並んでいた

みこ「今日も今日とて！ARKだああああああ！」

ぺこら「先輩こんな時までARKぺこかあ!?!wwww」

シオン「みこちゃん廃人とかそういう次元じゃないでしょwwwwww」

デデーン

兎田、紫咲OUT！

スパーン！スパーン！

フブキが腕時計を確認したのち

フブキ「中庭はこんなところだね、んじや「シケテンネエ！」次の「シケテンネエ！」  
場所に「シケテンネエ！」

トワ「又フツw」

ぺこら「うるさいぺこよwwwみこ先輩い！www」

デデーン

常闇、兎田OUT！

フブキが進行しようとする、みこが檻の中から

【もうちよつといじれ】

と言わんばかりに声を上げる



トワ「やっと一息つける…」

シオン「いや、これまだ始まったばかりじゃ…?」

ペこら「地獄…地獄ペこ…」

ミオ「ウチ達あと何回お尻しばかれるんだろ…」

スバル「実はこの部屋にもなんかあったりするんすかね…」

ピシヤツ

ドアが閉まり廊下でフブキはクスクスと笑う。

【さーて、休憩は必ずしも平穩が訪れるわけじゃないよ…ニシシ…】

5人は並んだ机に荷物を置き、

それぞれのやり方で休憩していた。

ここで口を開いたのは

トワ「ねえ、気になってたんだけどさ」

スバル「ん?トワちゃん、どうかしたっすか?」

トワ「いや、この机引き出しとかあるじゃん?これって所謂引き出しトラップだと思

うんだけどさ…」

全員が動きをびたりと止める  
罨

わかつてはいる

が、これは企画の1つ

V t u b e rとしてのプライドが彼女たちに火をつける

シオン「開けるしかない！」

ペこら「いや…正直開けたくないぺこ…」

ミオ「まあろくな目にはあわないだろうしね…、とりあえずウチのやつから開けてみるよ」

ミオが最初の引き出しを開いた

これが

地獄の始まり





デデーン

常闇、紫咲、兎田、大神OUT!

スバル「え!?!なに!?!みんなどうしたの!?!」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

スバル「い、いったい何が…」

スバルはパネルを裏返す

そこには

ホロライブの楽曲【Shiny Smily Story】のパッケージ

に、当たり前のように混ざる舞元啓介の写真



ぺこらの体に電流（物理）が走りぴくぴくと痙攣している

シオン「ぬふっw」

スバル「んふふwww」

デデー

紫咲、大空OUT！

スパーン！スパーン！

スバル「ベタすぎて逆に笑ってしまったツス…」

ぺこら「ぺこーらだけ笑いじゃなくて実害出てるぺこなんだけど!？」

トワ「え…この流れでトワ…?」

ぺこらの電流を見たあとで腰が引けるトワ

恐る恐る引き出しに手をかけ

トワ「…えい！」

引き出しを開くと、そこには

トワ「…またDVD…」

何も書かれていないDVD

他の引き出しには何も入っていないようで、とりあえずはよかつたと肩の荷を下ろす

シオン「うーん、当たり前外れ大きいみたいだし、これなら大丈夫そうだね！」



「「「…」」」

空気が一気に凍り付く

シオンはココパイに向き直ると

シオン「くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！」

ココパイをペシペシと叩き始める

すると

ボン！

ココパイが爆発した

シオン「うひゃあ!？」

「「「wwwwwwwwwwwwwwwwww」」」

デデーン

常闇、兎田、大空、大神OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

シオン「び…び…びつくりした…、けどまあちよつとすつきりしたかな…」

ミオ「さて、まだ消化してないのはウチとトワちゃんのDVDか…」

トワ「とりあえずミオちゃんのから消化しない？」

ミオ「うん……どっちも絶対ろくな内容じゃないだろうけどね……」

ミオはDVDプレイヤーにDVDを入れ、再生ボタンを押すと部屋にあるモニターに映像が映し出される

「いつも大好きなあなたに捧げる　大神ミオちゃんへ」

でかでかと現れた字幕

それを見た全員がぼかんとする

次に映し出されたのは

おかゆ「もぐもぐ～おかゆ～！ミオちゃんこんにちは～！僕だよ～！」  
ホロライブゲーマーズの猫又おかゆだった

ミオ「へ……？なにこれ？なにこれ？」

ミオは笑いの刺客が来るとばかり思っていたため事態を呑み込めないが、メツセージは続く

おかゆ「ミオちゃん、いつもホロライブのママポジションとして暴走する皆にツッコんでくれてありがとう。」

ぼくさ、ミオちゃんが人の何倍も頑張ろうとして辛そうにしてるのを見てさ

僕ももつとうまく言えたらって思うんだけど……ミオちゃんは味噌汁なんだよって。」

絶対に笑ってはいけない空間であることを忘れ、全員がメツセージに聞き入る。

なんならミオは唇を噛み涙をこらえてるようにすら見える

おかゆ「いつも濃い味のぼくたちを支える味噌汁として、みんなの支えになってくれるの本当に感謝してるよ。」

ミオちゃん、ありがとう

大好き。」





メッセージは続く

ころね「…んあ…おかゆ…なにこえ…」

おかゆ「ころさんころさん、ミオちゃんに向けて一言お願い〜」

ころね「…おあよ…」

トワ「んふつwww」

スバル「おかゆ！おまえええ！！！！www」

デデー

常闇、大空OUT！

スパーン！スパーン！

おかゆのメッセージがちよつと感動的な仕上がりだったこともあり

メッセージの温度差が激しい

おかゆ「もーだめだよころさん、ほら…こつちで着替えてさ、ちゃんとミオちゃんにメッセージ送るよ！」

ころね「うん…」

するといったん映像が途切れ

再び現れた映像は

「どうも〜！」

漫才師のようなスーツ姿でステージに上がるおかゆところねだった

「「「「ぶっW」」」」

ゲデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

トワ「なに…何が始まるの…!？」

おかゆ「どうも〜おかころボーイです〜！お願いします〜！お願いします〜！

スバル「これって完全にミ〇クボーイ…ミルク〇ーイじゃないっすか…」

そう、完全にネタの形式が〇ルクボーイだった

おかゆ「あ、ありがとうございませう！今、ころさんのリスナーさんの指をいただきました！ありがとうございませう！」

ころね「こんなんいくつあつてもいいもんね〜！」

ミオ「いや！どう考えてもグロいだろ!!!」

が、漫才は続く

ころね「最近友達がね、好きなV t u b e rの箱があるっていうんだけどね、その名前を忘れちゃったっていうんよ〜」

おかゆ「好きなV t u b e rの箱の名前を忘れちゃった!?!どういう状況なのそれ〜?じゃあさ、僕がその友達が好きな箱がどこのか一緒に考えてあげるから友達が何か特徴を言ってなかったか教えてくれる?」

ぺこら「割としつかり漫才やってるぺこね…」

スバル「いや、ここからが問題だと思っつス…」

そう、ここはネタのさわりの部分に過ぎない

さらに漫才は進行していく

ころね「カバー株式会社が運営してて、今は27人のアイドルV t u b e rが所属し

ている箱らしいんよ」

おかゆ「あ」

ホロライブじゃくん

トワ「ぶっw」

デデーン

常闇OUT!

スパーン!

ミオ「トワちゃんまだオチまでいってないよ!」

トワ「気抜けてた…今度は…」

映像が再度流れ始め漫才は続く

おかゆ「その特徴は完全にホロライブだよ、ホロライブで決まりじゃくん」

ころね「違うと思うんだよなあ」

おかゆ「どうして?」

ころね「ころねもホロライブだと思ったんだけどね?その子が言うには



スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

スバル「おかゆお前ー！ネタにしていることと悪いことがあるだろうが！」

トワ「ぐぐぐ…」

スバルが声を荒げてでも漫才は再開される

おかゆ「ほかにもなにか特徴言つてなかった？」

ころね「半分以上がARKで生活を侵食されてるらしいんだよ」

おかゆ「ホロライブじゃくん、一時期どの時間にもARKしかないホロジュールがあるくらいだったのはホロライブしかないじゃない？」

シオン「んフフフフフフフフフフ」

ぺこら「っーはあwww」

デアーン

紫咲、兎田OUT！

スパーン！スパーン！

容赦ないケツバットが執行され、さらに進行する

ころね「それが違うらしいんだよね」

おかゆ「何が違うの？」

ころね「その子が言うにはね？」

みんな清楚すぎて汚い言葉を一切使わないっていうんよ」

おかゆ「あゝ、ならホロライブじゃないね」

ホロARKなんて暴言とう○ちを連呼する配信ばかりだもんねゝ  
命のやり取りとう○ちがあんなに安価で行われる配信なんて他にないと思うよゝ  
そもそも広げた人物が人物だっただけにみんなキマっていったよねゝ」

「「「「「こらー！配信にのせられなくなるだろおお！ｗｗｗｗｗｗ」」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

スパル「もうやだ！見るのやめよ！これ以上は無理っス！」

ミオ「まあ…あと少しで終わりだろうし…」

おかゆ「他にも何か言ってなかった？」

ころね「事務所の最初の配信者は初配信の視聴者が13人だったらしいんよ」

おかゆ「ホロライブじゃくん、ときのそらちゃんの初配信の視聴者が13人っていうのはホロライブしかないじゃくん。

そんなときのそらちゃんがメジャーデビューもして

沢山の後輩が出来る

今では登録者30万人を突破したっていうちようエモいやつじゃくん

そんなのもうホロライブで決まりだよ、ころさんの友達が好きな箱はホロライブだよ」

唐突なエモに黙って聞き入る5人

ころねが続ける

ころね「ころねもホロライブだと思っただけどね？その子が言うには、

ホロライブではないっていうんよ」

「「「「「W W W W W W W W W W」」」」」

デブアーン



全員OUT!

全員が笑いながら崩れ落ちる

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

おかゆ「じゃあホロライブじゃないじゃ〜ん

そらちゃんのエモい話してるときどんな気持ちで聞いてたのさ〜」

ころね「ごめんねおかゆ〜」

おかゆ「じゃあころさんはどこだと思うのさ〜?」

ころね「ころねが思うにはね、のりプロだと思うんよ」

おかゆ「いや絶対違うでしょ〜、もういいよ!」

ころね・おかゆ「どうも、ありがとうございました〜!」

ここで映像は途切れた

音のない空間が訪れると

「「「ぬっふうwwwwww」」」

デデーン

全員OUT!

全員糸が切れたかのような脱力感に襲われ、気が付けば笑っていた。

スバル「一体何を見せられてたんスカね…」

シオン「やばいwww腹痛いwww」

ぺこら「おかころおそるべしぺこ…」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

おかころの脅威は去った

が、忘れてはいけない…

DVDは

1つではないことを

絶対笑ってはいけない悪魔に天使は微笑む

トワ「さて…じゃあトワのやつも入れますね？」

「「「ゴクリ…」」」

トワがDVDをプレイヤーに挿入する

モニターに真つ暗な映像が流れたあとに字幕が現れる

【いつも大好きなあなたに捧げる 常闇トワ様へ】

ミオ「またこのパターンか…」

トワ「でも、最初は普通のメッセーজみたいですし…」

最初に現れたのは

ホロライブ4期生の角巻のためだ

トワ「あ、わたちんだ」

わため「こんばんドドド！」

ド畜生！

角巻w<now loading>

なぜかVTRの自己紹介中に読み込みが入る

「「「「ぶぶぶつ…:wwwwww」」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！  
 スバル「クソ雑魚回線卒業してもこのネタは続くんすね…」  
 ペこら「一時期は定番ネタだったのに完全に油断したぺこ…」

VTRの再生が再開される

わため「トワち！

かなたとわためと3n<now loading>

nでホrr<now loading>

aイブの事務所に行ったt<now loading>

oきのこと覚えるk<now loading>aな？

わたm<now loading>

「「「「んふwww」」」」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

シオン「なにこれ…これどうやって耐えればいいの…?」

映像は無情にも続く

〈now loading〉

〈now loading〉

〈now loading〉

〈now loading〉

映像は…

〈now loading〉

〈now loading〉

〈now loading〉

〈now loading〉

〈now loading〉

〈プツン〉

続かなかった

「「「いや終わるんかい!!」」」  
「「「」」」

デデーン

全員OUT!

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

ぺこら「いまのでわためちゃん終わりぺこか…？」

スバル「回線ネタに全部飲み込まれていったつスね…」

映像が切り替わり、

次に映ったのは

かなた「へい！こんかなた〜！トワ〜！」

ホロライブ4期生の天音かなた

かなた「トワ、かなトワでマイクラやったり一緒に脱出ゲームやったり…

4期生で初めてホロライブサーバーに行った時もさ

みんな自由な中でトワだけはぼくの言ってたこと陰でやってくれてたりさ

ほんとトワにはいつも助けられてるよ！」

トワ「…」

ミオ「あれ…トワちゃん泣いてない？」



シオン【同期からのメッセってやっぱ来るものがあるんだろうね】

なおも映像は続く

かなた「トワいつつも一人で悩んで一人で抱えこんだりとかしちやうからさ  
そういう時は遠慮しないでぼく達を頼ってよね！

ぼくも結構抱えちやうほうだからさ

逆に僕が悩んだ時にはさ

トワがぼくを助けてくれたら…嬉しいな」

トワ「…グスツ…」

「「「…」」」

メッセージに全員が言葉を失う

トワに至っては涙をこらえることが出来ないほどに  
が、映像の再生はここでは終わらなかつた

現れたのは劇場の舞台

そしてギターの音色が聞こえてくる

ミオ「これもどこかで見たようなセット…」

シオン「まさか…ね…」

舞台上にかなたが現れる

そして

かなた「ぼくは貧しい農夫♪

年老いた母親と♪

二人きりでくらくらしてる♪」

突然歌い始めた

スバル「んふふふwww」

デーン

大空OUT!

スバルが何かを察したのか、笑いをこらえられなかった  
スパーン！

スバル「これあれっスね…どぶ〇つくじやないすかあ！」

ツッコむ間も映像は止まらない

かなた「不治の病に侵され〜♪

苦し〜む母を救うため〜♪

薬〜を求めて森にやってきた〜♪

【この森のどこかに薬があるはずだ！どこだ！どこにあるんだ！】

ミオ「迫真の演技だね…見入っちゃう…」

ぺこら「ここままでならまだミュージカルって感じぺこね」

すると袖から

ひげ面をつけたわためがギターを持って現れた

わため「まっていたぞ私が♪

なくやめる民をすくう♪

この森にすむ♪神様だ♪

かなた「【かつ…神様!?!】」

シオン「わためもすごいね…声量っていうかなんて言うか」

スバル「油断大敵っすよ…」

そう、ミオの例を見るならこのDVDは笑いの刺客による罠である  
映像の劇は進んでいく

わため「はくはを思うお前の♪

優しさに胸くうたれ♪

お前を助けにやっつけてきた♪

かなた「本当ですか?♪



トワ「これ、あなた絶対意味わかんないで言ってるでしょ!」

だが劇は止まらない

かなた「大きなイチモツをください♪

大きなイチモツください♪

肩に担げるほどの♪

大きなイチモツを私に下さい♪」

相手役のわたためも笑いをこらえているのか唇が震えている

が、わためは続ける

わたため「そうじゃないだろ?♪

話がちくがう♪

病の母はどうした?♪」

かなた「そうだそうだった、母の命が一番大事♪

だくけくど♪

大きなイチモツをください♪

大きなイチモツをください♪

銭湯でみんなが二度見する♪

大きなイチモツを私に下さい♪

「「「も〜!!!」」」

デデーン!

全員OUT!

ぺこら「もうだめwww堪えらんないぺこwww」

シオン「もう止めてwww最後まで見れないwww」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

わたため「さつきから下ネタばかり!もう帰るけど、わためは!わ r h n o w l o

a d i n g

スバル「またかいwww」

トワ「もおおおお!www」

デデーン

常闇、大空OUT!

スパーン！スパーン！

そのまま映像が途切れる

どうやらここまですごいようだ

トワ「や…や…やっと終わった…」

スバル「DVDこんないきついととは思わなかったつス…」

ミオ「ねえ今のでどのくらい時間たったんだろ？」

シオン「えくと…え？まだ9時半!?まじ!?!」

ぺこら「もー！いつになったら終わるぺこかこの地獄!!!!」

引き出しの恐怖を脱した5人

だが、これはあくまでも序章に過ぎないのである

笑いの刺客たちはまだ彼女たちの見えないところに潜んでいるのだ…



## 絶対に笑ってはいけないオーデイション

同日 9:45

引き出しの恐怖を乗り越え、

彼女たちは各々休憩していた

ミオ「お茶菓子いる人いる？プチシューとかあるみたいだけど」

シオン「シオンはいいや、ちよつと水飲もう」

シオンは近くにあったウォーターサーバーから水を

ミオは近くにあつた菓子の詰め合わせからプチシューを手に取る

トワ「こんな状況じゃものがど通らないなあ…」

ぺこら「まあずつと気を張つても仕方ないぺこ」

スバル「まあいつ刺客が来るかわかんないから油断はしないっすけどね」

と、会話する中ミオとシオンが手に取ったものを口に含んだ

次の瞬間

ミオ「ヴオオオオオ!!!」

シオン「ヌウウウウウ」

!!!!!!?????

「「え!?!」」

ミオはのたうち回り、シオンは口に含んだ水を嘔き出していた  
3人は状況が理解できない

トワ「なに!?! 2人ともどうしたの!?!」

ミオ「ハツアハツア…これ…わさ…び…ヌウウウウ…」

シオン「これなに!?! クエン酸!?! ありえないんだけど!!!?」

「んフフフフフフ」

デデー

兎田、大空OUT!

スパーン！スパーン！

トワ「もう！これ笑える仕掛けじゃないよ…はい、ミオちゃんもシオン先輩もお茶飲んで」

ミオ「カツハあ…トワちゃんありがと…」

シオン「これ仕掛けたスタッフ許さないからなあ…」

お茶菓子やウォーターサーバーの仕掛けもあり、

5人は周りのものをいじるのをやめた

するとドアが開き、フブキが中に入ってくる

フブキ「はいはーい、みんなには今から行われるオーディションのシミュレーションを見学してもらうよー」

スバル「オーディション…」

ぺこら「もうすでに嫌な予感しかないぺこ…」

全員乗り気にはなれないながらもこれは企画だからと割り切り  
部屋をあとにする

ついたのは会議室のような大きな部屋

ドアの横には

【今日から始める魔法少女 オーディション会場】

と、オーディションのシミュレーションとはいうものの本格的に張り紙までしてあつた。

ミオ「なんていうかさ、結構ちゃんとしてるね」

フブキ「さあて、入った入った」

フブキがドアを開け、5人が中に入る

その先にいたのは

たまき「それでは本日の審査を担当します、犬山たまきです。皆さんすわってください」

のりプロの犬山たまき、そして

オーディションを受けに来た役として3人のアイドル

赤井はあと

潤羽るしあ

と、なぜかバスロープ姿の宝鐘マリン

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

デブ

全員OUT!

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

スバル「絶対あれオーディションの意味間違えてないっすか…？」  
シオン「船長が刺客か…厄介だなあ…」

たまき「では、1番の方から自己紹介をお願いします」

はあとが立ち上がり1度深呼吸する

はあと「ハッハッしょ、小生いわあ→ハッハッハッ！ああああかいひひひひひは  
ははっはははあとといいますう…」

なぜか自己紹介がキモオタスタイルだった

ミオ「んふふふwwwwww」

スバル「ぶっふ…www」

デデーン

大空、大神OUT！

シオン「ツハアwww」

デデーン

紫咲OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！

たまき「では、2番の方」

今度はるしあが立ち上がり

たまきへと近づくと

るしあ「どうも、ルシファアです…審査員さん…今日はよろしくね」

なぜかイケボでたまきにささやいた

「「「ぬふっwwww」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

トワ「オーデイションで審査員になって詰め寄ってるの…」

ぺこら「ホスト3期生のスタイルで来るとか卑怯ぺこ…」

スバル「まだっス…まだ問題児が…」

そう、まだマリンが残っている

マリンが立ち上がると同時に

「「「ゴクリ…」」」

全員が息をのむ  
そして

マリン「ホロライブ所属、宝鍾マリンと申します、本日はよろしくお願いいたします」

たまき「…」

「「「「…」」」」

たまき「では、質疑応答に入らせていただきます」

「「「「いやボケないんかい!!!」」」」  
「「「「w w w w」」」」

デブーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

あれだけボケそうなスタイルで一番まともな自己紹介を通されたらそれは耐えられるはずもない

たまき「では皆さんには柔軟な演技力を見せていただきます」



今から自分が一番自信があると思うものまねをしてください

どんなものでも誰の物まねをしても構いません

スバル【ものまね…】

トワ【いつもなら船長の十八番ですけど…】

ペこら【さっきの流れだと全く予想がつかないぺこ…】

全員いつ来るかわからない衝撃に備える

はあと「…A↘S↘M↘R↘」

スバル「ちよつとおwww」

「「www」」

デデーン



スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！  
たまき「では、3番の方」

マリ「Er」はい、ありがとうございます。オーディションは以上になります」

「「「んぬwww」」」

デーン

全員OUT！

あまりにもぶつ切りである

遮られたマリ自身がぼかんとしている

おそらくは台本には書いてなかったであろう

たまき「オーディションの結果は追って通達します、それでは失礼いたします」

と、審査員役だったたまきが部屋を退出しようとドアに手をかける

たまきが席を立つてからそれを5人は目で追っていた

そして目に入ってきた

スカートがめくれあがってパンツが丸見えだった

トワ「つふふ！WWW」

シオン「もー！WWW」

デーン

常闇、紫咲OUT！

スパーン！スパーン！

そのまままきは退出

フブキから5人に声がかかる

フブキ「どうだった？どうだった？すごかったでしょ？」

トワ「すごいの意味はいろいろずれてましたけどね…」

ぺこら「完全に意表突かれたぺこ…」

フブキ「はいはい、それではまた移動するのでみんなついてきてね」

オーディションのシミュレーションを乗り越えた5人

彼女たちへの刺客の攻撃は

まだまだ続く

# 絶対に笑ってはいけない舞台の主

同日 11:00

5人を連れフブキがやってきた部屋は〈管理人室〉

と書いてあった

フブキ「合宿所の管理人さんがさつき戻ったから挨拶行こう」

ぺこら「こんな企画に参加するんだからろくな管理人じゃ無いぺこ…」

ミオ「まあ…まだ誰かもわからないしさ…」

コンコン、とノックをするとフブキが先行し中へと入っていく

フブキ「失礼しま〜す管理人さん、この5人が今日から研修に入ったアイドル達です」

後ろを向いて椅子に座った管理人の姿は全員見えていない

座っている椅子が回転し

その姿を現す





スバル「アツハアｗｗｗ」

デデー

大空OUT!

シオン「スバルちゃん？」

スバル「違うんすよｗｗそら先輩からそういうのが出るのがおかしくてｗｗｗｗ」

シオン「アツ、フーン…」

スパーン!

続いてそらはぺこらの前に立つ

ぺこら「そ、そら先輩…」

そら「…」

ぺこら「…」

そらはポケットからクラッカーを取り出すと

パァン!

ぺこら「ぺこお!？」

ぺこらの前で盛大にならした

ぺこら「な、なにぺこか今の…」



そら「さて、次は大空スバルちゃん！」

ぺこら「いや今のでぺこらの終わりぺこお!？」

「「「wwwwww」」」

デデーン

常闇、紫咲、大空、大神OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

ケツバットこそされなかったがぺこらはどこか納得できない心持ちだが、そらは続ける

そら「改めまして、大空スバルちゃん」

スバル「は、はい！」

そら「わたしね！ものまねが得意なの！見てもらっていい？」

スバル「ど、どうぞ…」

そら「んじやいくよ」



そら「あつ荒ぶる鷹のポーズ！」

「「「「…」」」」

そら「みんなどーしたの!?!元気ないぞー!?!」

「「「「いや、そういうのじゃないです」」」」

全員謎の罪悪感に襲われる

わらつてはいけないのだが、自分たちの偉大なる先輩が滑ってる光景はもつと堪える。

そら「みんなを元気づけるために!とぎのそら!歌います!」

トワ【そら先輩の生歌!】

ぺこら【まじぺこ!】

そらは一旦5人から離れると

カラオケマイクを手に歌いだす

そら「びびPPT!びびPPT!」

「「「アウトおおおおおおおお！ｗｗｗｗ」」」

デーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

スバル「もおおおお！そらともから襲撃されても知らないっすよ!？」

シオン「もうこれ無理でしょ！」

そら「それじゃあみんな企画頑張つてね〜」

そう言い残すとそらは管理人室をあとにした

フブキ「どうだった？素敵な管理人さんだったでしょ？」

トワ「間違いなく素敵だったけど」

ミオ「それ以上にすごいもの残していったけどね…」

フブキ「お、いい時間だねみんなお昼にしようか〜」

「「「お昼？」」」

ときのそらという大きな爆弾の登場に圧倒された5人

一時の休息を迎える彼女たちだが  
その休息は真に安寧であるか  
それはまだわからない

# 絶対に笑ってはいけないランチタイム

同日12:30

5人はフブキに連れられて合宿所の食堂へとやってきた

トワ「合宿所の食堂っていうからどんなのだろうと思つたら、結構ちゃんとしてるね」

ミオ「だねえ、実際のとこ笑いすぎておなか減つてたしい息抜きになるといいんだ

けどねえ」

フブキ「ムフフ：まあ全員がおいしい思いをできるわけじゃないけどね〜♪」

フブキが5人を連れ券売機の前へとやってくる

フブキ「ここにあるメニューから好きなの選んでいいよ〜」

スバル「なんかずいぶんと太っ腹っすね〜」

ぺこら「どんなメニューがあるぺこ？」

シオン「えつと…」

牛丼

牛肉を甘じよっぱく煮たのをご飯に乗せた丼

ビーフオンライス

うしどん

GYUDON!

牛と丼

牛さんいつもおいしいお肉をありがとう、君のことは食べるまで忘れない丼

「「「牛丼しかないじゃん!!!」」」  
!!!」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

スバル「もうここの刺客がだれかわかった気がするっス…」

ミオ「うん、これは間違いなく…」

ノエル「あびやびやびや！みんないらっしやい！」

「「「ですよねー！」「」」」

5人が分かり切った展開ではあったがホロライブ3期生の白銀ノエルが割烹着姿で現れた

シオン「ノエルちゃんなんで牛丼しかないの！」

ノエル「牛丼だけで何が悪いか！牛丼はですね！団長の人生といっても過言ではないんですよシオン先輩！」

シオン「あつ…ご…ごめんなさい…」

ぺこら「ノエルwww」

デデーン

兎田OUT！

スパーン！

ノエル「まあ、というのは冗談ですね、5人にはホロライブスタツフさんがおいしいお昼を準備してくれましたらばちばち！」



フブキ「たぐだぐし！今からやるミニゲームで順位が高ければ高いほどランクが高いものを、低ければ低いほど質素になります！」

「「「ええ……」」」

フブキ「はい、クレーンは受け付けませ〜ん！では1回戦！」

そういつて取り出したフリップをめくる

そこに書かれていたのは

わさびシュークリームロシアンルーレット！

ミオ「いやあああああああああああああああ  
!!!!!!」

「「「wwwwwwwwwwwwwwww」」」

デデーン

常闇、紫咲、兎田、大空OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

フブキ「ん？どつたのミオ〜？」

ミオ「どつたの〜？じゃない！」



全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

ミオ「ど、どうする?」

ぺこら「これは平等に!恨みっこなしで!」

「「「「じゃんけんで!」」」」

全員が鋭い眼光でお互いを見つめ

「「「「じゃん!けん!ポン!」」」」

トワ グー

シオン パー

ぺこら パー

スバル パー

ミオ パー



トワ「あれ？甘い」

「「「あああああああああああああああああああ  
!!!!!!」」」

フブキ「誰も盛られてるほうがわさびなんて言つてないもくん☆」

4人がわさびの辛さにのたうち回ったり水を飲んだりと完全に地獄絵図

ノエル「トワちゃん一抜けく！おめでとく！」

トワ「やったああああああああああ！よっしやあああああ！ざまあみろお！」  
ぺこら「途端に強気になったぺこねえ!？」

その後

第二戦 せんぶり茶ロシアンルーレット





大空スバル コンビニのサンドイッチ

兎田ぺこら 沢庵

ぺこら「納得できないぺこおおおおおおおお！」

沢庵をポリポリとしながらぺこらが愚痴ると、トワがお重の1段を持ってきて

トワ「えつと…ぺこらちゃんこれ食べる？」

フブキ「おつと！駄目だぞトワ様！ルール上分け与えるのはペナルティだぞお？」

トワ「でも、うん…」

ぺこら「…まあ、負けたのはぺこらだしルールに従うぺこ…」

トワのやさしさに触れたからか、ぺこらはおとなしく引き下がる

ミオ「ぺこらがあつさり引き下がるなんてね」

スバル「トワちゃんも優しすぎな気もするっすけどね」

試練の先にあつた数少ない平穩

これもいつまで続くことやら…



## 絶対に笑ってはいけない待ち伏せ

同日 13:45

昼休憩が終わった5人は休憩室へと戻る道中

ぺこら「なんやかんやお昼中はなんの仕掛けもなかったぺこね」

トワ「その過程は大変だったけどね…」

スバル「まあそのくらいがちょうどいいのかもしれないっすね」

そんな他愛のない話をしながら歩いていた

休憩室にたどり着くと

ドアに張り紙があった

【あくたんINしたお♡】

「[[[[[[ぶつwwww]]]]」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

ミオ「もう誰がいるかわかってしまった…」

スバル「まあ、わかってる分耐性つきそうな感じあるっすけどね」

シオン「あくあちゃんだったら何とかかなりそうだね」

そういつたシオンがドアを開けると

あくあ「ハツハツハ!まっていたぞ!」

「[[[[[[あ、やっぱりいた]]]]」

あくあ「ほんとに待ってたんだよ…」

4時間くらいここで」

「「「んふつwww」」」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

トワ「えつと…4時間つてなると…」

ぺこら「ちようどぺこら達がいなくなったあたりぺこね」

あくあ「その時間にかけて仕掛けるって聞いてたのに!部屋に入ってきたら誰もいない!!おかしいじゃん!!」

あくあが地団太を踏んでいるのをみてミオが問いかける

ミオ「じゃあ今まで何してたの?」

あくあ「えつと…笑わない?」

5人全員が首を縦に振る

あくあ「あのね



ぺこら「で？何人来たぺこか？」

あくあ「…」

「「「「「…」」」」」

空気が一瞬で凍り付く

あくあ「ハツツアハツハツハツハツハツハツハツハツ…」

あくあの過呼吸が止まらない

全員が分かっていた

凸にはだれも

こなかったであろうこと…

静寂の中あくあが口を開く

あくあ「知ってたわよ！正直最初1時間こない時点で察したわよ！

2時間過ぎたあたりでみんなネタが切れて雑なノリしかしなくなったのもコメントみてたわよ！」

バンバンバンと台パンが止まらない

ぺこら「あくあ先輩大丈夫ぺこ、きつと次は来るぺこよwww」

スバル「そうっすよ、元氣出すっすwww」

デデーン

兎田、大空OUT！

あくあ「お前から絶対バカにしてんだろうがあ!？」

ぺこら・スバル「いいえwwwまったくwww」

あくあ「ムッキーーーーー！」

スパーン！スパーン！

あくあ「このままだ帰るんじや腹の虫がおさまらない！あていしと勝負だよ！」

ミオ「勝負って言ったって…何で？」

あくあ「ふふふ、ここにはちょうど良くいたずらグッズがいっぱいあるからね

わざと「『』却下『』」なんでよおおおおおおお！？」

ミオ「もうその件3回目なんだけど！」

あくあ「え？そうなの…？」

他の4人も頷く

正直もうロシアンルーレットはこりこりだった

あくあ「むむむう…勝負も成立しないなんてえ…！お前ら覚えとけよお！絶対許さないかなあ！」

そういつてあくあは乱暴にドアを開閉し、休憩室を出ていった

ミオ「嵐のように過ぎ去っていったね…」

ペこら「いやあ、流石といふかなんというか…」

スバル「わかってても笑っちゃうつすよ…」

この時彼女たちはあくあの襲撃で気づいていなかった

この部屋の仕掛け

引き出しトラップの中身が入れ替えになっていることに…



## 絶対には笑ってはいけない恐怖の再来

あくあが退室し

各々が自分の机に戻る

シオン「ん？張り紙されてる…えつとなになに

【引き出しの中身はリセットしておいたかね！バーカ！バーカ！ざまあみろ！  
くあ】 湊あ

…まじで？」

全員がさつき自分に起こったことをフラッシュバックする

中には震えが止まらないものもいる

スバル「覚悟決めるしかないっスよ…」

トワ「うううう…」

シオン「さつきの逆順でシオンから行こうか、あんま意味ないと思うけどさ」

4人も頷き

シオンが引き出しに手をかけ

一気に手前へと引いた

シオン「うわっ…マジか…」

中には謎のボタンが1つ入っていた

シオン「これどう考えてもDVDみたいな奴じゃん…」

ミオ「とりあえずは他のみんながなに入ってるか見てみようか」

トワ「次はトワかあ…」

トワが恐る恐る引き出しを開けると

中には3枚のパネル

トワ「なんだろこれ？」

スバル「トワちゃん、1枚ずつこっちに見せてみて」

トワ「おっけ、んじゃ1枚目」

1枚目のパネルには

ハトタウロスと体を交換した大神ミオ画像

「「「んんふふふんwwwwww」」」

デデーン

紫咲、兎田、大空、大神OUT！

「アツハツハツハツハツハハwwwwww」

デデーン

常闇OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

ミオ「しまった…まさかここでそれを持つてくるとは…」

トワ「と、とりあえず2枚目行くよ…」

2枚目のパネルには

足のおいをかぐ赤井はあとの生写真

「「「アウトおおおおおおおお！ｗｗｗｗ」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

トワ「これ、つかって大丈夫なの…？」

ぺこら「てかコラ画像ですらないあたりがほんと恐ろしいぺこ…」

シオン「さ、最後の1枚は？」

トワ「う、うん…えい」

3枚目のパネルは

トワの帽子に擬態したビビ

が、ガチムチになった姿とハトタウロスのプロレスの試合の宣伝ポスター

「「「ぶつｗｗｗｗｗｗ」」」

デデー

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

ミオ「どうしてこんなことに…」

トワ「…んはあつｗｗｗｗ」

デデー

常闇OUT！

トワ「だめだｗｗｗｗツボにｗｗｗｗ」

スパーン！

トワ「ふう…」

んっふwww」

ぺこら「っはーwww」

デデー

常闇、兎田OUT！

スパーン！スパーン！

ぺこら「しまった…：つられて笑ってしまったぺこ…」

トワ「こ、今度こそ落ち着いた…：次はぺこらちゃん？」

ぺこら「さつきは電流だったぺこだからもう同じ手は食わないぺこよ…」

そういつてぺこらは引き出しに手をかける

そして一気にそれを手前に引いた

中には

親愛なるあなたへ

と書かれた1つのケーキが入っていた

ミオ「ケーキ？」

シオン「他には？」

ぺこら「…なんもないぺこねえ…」

トワ「匂いも普通の甘いケーキのにおいだね」

スバル「食べてみたらいいんじゃないすか？」

ぺこらは促されるまま、ケーキを口にする

ぺこら「普通のケーキぺこ！おいしいぺこー！」

シオン「なにそれえ？ずるくない？」

スバル「でもおかげで希望が持てるっす！今度はスバルもアタリ引くツスよ！」

そういつてスバルは意気揚々と引き出しを開けると

ペヤング激辛MAXEND（調理済み容器なし）がぎっちり詰まっていた

スバル「スタッフお前からあほだろおお！www」

デデー

大空OUT！

スバル「食べ物で遊んでんじゃねえつすよ！」

※あとでスタッフが泣く泣くおいしくいただきました

ミオ「最後はウチだね：DVDだけは勘弁だよ：？」

そういうと引き出しに手をかけ、ゆっくりと中身を覗き見る

中に入っていたのは

1〜3番ロッカーのカギ

ミオ「ロッカーのカギ？開けろってこと？」

スバル「何が仕掛けてあるかわからないから気を付けるつすよ？」

ミオが1番のロッカーカギを差し入れ

ロッカーを開けると



中から手足を縛られ、ヘッドホンと目隠し・猿轡をされた舞元啓介が現れる

「「「「wwwwwwwwwwwwwwwwww」」」」

デデーン

全員OUT!

スバル「おじおじwwww何してんスカまじでえ!!!」

ミオ「まさかまた出てくるなんてwwww」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

罰執行後すぐに、スバルは舞元の拘束を解いてやる

スバル「おじおじ?大丈夫つすか?」

舞元「スバル:?すまねえな:お礼にお前らに1つずつこれをやるよ」

そういつて舞元は全員に封筒を渡す

舞元「どうしようもない時に開けな、それまではぜったいあけるんじゃないぞ?」

いいか？フリじゃなく絶対だからな!？」

全員が戸惑いながらも頷くと、舞元は部屋から出ていった。

ミオ「封筒は舞元さんも言っただけどまずは後回し、このまま2番と3番も開けてみるね」

2番のロッカーにカギを指しまわした

ロッカーの中には1枚の紙が入っていた

ミオ「えつとなになに…」

【身代わりチケット 自分にお仕置きが執行される時、ルーレットでランダムに選出された相手を身代わりにすることが出来る】

…え？」

「「「…」」」

全員が一瞬で理解した

ミオが手に入れたのはこの企画においてどれだけの意味がある一枚か

ミオ「ウ、ウチは使わないよ！きつと…多分…」

ぺこら「一気に不安になったぺこだよお!?!」

スバル「ミオちゃんほんと頼むっスよ!?!タイミング次第じゃほんとにやばいっすよ!?!」

ミオ「と、とりあえず最後のロッカーを…」

3番のロッカーを開けると

中には一枚の紙

ミオ「えっと、このロッカーを開けた人に

「タイキツク!」

「デデーン」

「大神タイキツク」

「!!!」

だが4人の頭の中にはミオがタイキツクをされることより先によぎったことがある

「【(身代わりチケットここで使うのでは?)】」

「全員の視線がミオに集まる」

「ミオは身代わりチケットを見つめると」

「ビリッ!」

「それを破り捨てた」

「【!!?】」

「ミオ「…」」



シオン・ペこら【「やっべ、自分にきてたら絶対使ってた…」】  
…彼女たちも相変わらなかつた

# 絶対に笑ってはいけないボタン

5人が次に注目したのはシオンの引き出しに入っていたボタン

ミオ「まあ押してもろくなことにはならないだろうね…」

シオン「まあ。それがわかってても押すしかないんだけどね」

ポチッ

シオンはあっさりボタンを押す

ぺこら「シオン先輩もうちよつとためらいつてもものはないぺこ!?!」

スバル「何が起こるかわからないのに随分あっさりっすねえ!?!」

するとモニターに映像が流れ始めた

【クイズ! 案件を受けたのはだれ!】

【「「「なんかはじまった…」」」】

【これから登場する3名の誰かが! 芸人のネタをコピーして披露!

いったい誰がオファーを受けたのかを当ててください!】

トワ「なんか普通に面白そうなの始まったんだけど…」

【今回オフアーする内容は

にし〇かすみこ！

ボンテージと鞭という女王スタイル！

果たしてオフアーを受けるのはだれなのか！】

スバル「チヨイス絶妙に古いつスね…」

シオン「つてなると問題なのはメンバーかなあ…」

そう言つてモニターに注目すると

【一人目はこちら！

イノナカミュージック所属！AZK I！】



「「「「?????  
「「「「」」」」」」

1人目から意表を突く人選に全員が顔を見合わせる

【こちらなんですが】

AZKI「えっと…ポントージ? AZKIが?」

【はい…うけていただけなのであれば…ですが…】

AZKI「うーん…まあ…集団でやる企画に参加するのはいいばかりなんですけど…」

ここでAZKIの映像は終了

シオン「えっと…反応的には有り無し微妙なラインだったね」

ミオ「あ、次の始まるよ」

【2人目は

ホロライブ所属!アキ・ローゼンタール!】

〈〈〈〈絶対受けそうな人来た!〉〉〉〉

【こちらの企画なんです】

アキ【あのですね…仮にも私アイドルですよ？

たとえ天神子兔音ちゃんをにち〇ち〇かためつて聞き間違えてもアイドルなんです  
よ!!】

「「「「んんふwww」」」」

デブーン

全員OUT!

スバル「油断するとすぐそのネタとんでくるっスねえ!」

トワ「もー!アキ先輩い!」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

アキ【とにかく!私はやりませんから!】

と、アキの動画が途切れる

シオン「結構はつきり断ってたね」

ミオ「だね、こういうの乗ってくるタイプだと思ってたけど」

ぺこら「あ、最後の人来るぺこよ」

【続いて3人目はこちら

にじさんじ所属 リゼ・ヘルエスタ！】

スバル「へえ、ここのにじさんじから来るんすね」

ぺこら「ますます読めなくなつたぺこ…」

【こちらなんですが】



タであるぞ」

トワ「ツハアw」

デデー

常闇OUT！

スパーン！

【し、失礼しました】

チャイカ【うむ】

【皇女殿下、受けていただけますでしょうか…？】

チャイカ【たわけが】

【え？】

映像が一度途切れ、再びうつったモニターには

【オファーを受けたのは誰でしょうか!?目の前のマイクに向かってお答えください】

と、表示されていた

ミオ「えっと、シオンちゃんが答えなきやだよね」

シオン「え、えっと…アキちゃん！」

するとモニターの文字が切り替わり

【だれがオフアーを受けたのか！登場していただきましょう！】  
するとにし○かすみこの入場BGMが流れ

A Z K I がボンテージ姿に鞭を持って現れる

A Z K I 「あああああああああああああああ！

V t u b e r 〓、 A Z K I だよお」

「「「「うっそお w w w w w w」」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

すると再び入場の音楽が流れ

アキロゼがボンテージ姿で鞭を持って登場する  
アキ「あああああああああああああああああ！」

アキイッ・ローゼンタールだよお」

「「「「ぬっふうwww」」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！  
全員の罰執行が終わった直後

再び入場曲がかかる

スバル「嘘っスよね!?!まさかチャイチャイも!?!」

ぺこら「野郎のボンテージなんて移せないぺこだよ!?!」

シーン…  
何も起こらない

ミオ「いやこないんかいいいいWWW」

スバル「んっはあWWW」

デアーン

大空、大神OUT！

スパーン！スパーン！

A Z K I「音楽活動中心なのに〜こんな格好で3流バラエティのパクリ企画に出てる



のは…どこのどいつだ？

AZKIだよ！

スバル「んふふふwww」

デーン

大空OUT！

スパーン！

アキ「天神子兔音ちゃんのことをうち〇ち〇かためつて聞き間違えたのは、どこのどいつだ？

あたしだよ！

「「「やめてえwww」」」

デーン

全員OUT！

AZKI・アキ「満足かい？この…豚野郎！」

「「「いや、終わりい!? w w w」」」

デデー

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

あれだけ壮大な前振りからあまりにもあつさり撤収するもので全員拍子抜けしてしまった。

シオン「なんというか…すごかった…」

ミオ「うん…インパクトがね…」

引き出しトラップを乗り切った5人

だが、笑いの刺客の攻撃はこれで終わったわけではない

そう、まだまだ終わりはしないのだ…

## 絶対に笑ってはいけない館内放送

同日 15:30

シオンとスバルはトイレに向かっていた

シオン「あんま自分たちで部屋から出てなかったけど結構広いよねここ」  
スバル「確かにそうっすねえ、よく抑えたなって感じるッス」  
トイレにたどり着くとドアに張り紙があった

男性用トイレ

女性用トイレ

犬山たまき用トイレ

シオン・スバル「「いやなんで!? w w w」」

デデーン

紫咲、大空OUT！  
スパーン！スパーン！

〈休憩室組〉

ミオ「このお茶菓子大丈夫なんだろうねえ…？」

トワ「まあさつきのこともあるし下手に触れないほうが」

ぺこら「なにが畏になってるかわからないしそれが一番ぺこだね」

デブーン

紫咲、大空OUT！

「…え？」

3人は顔を見合わせる

トワ「まさかトイレにも…？」

ぺこら「ってことぺこだよね…」

ミオ「この部屋ってまだ平和な部類だったんだね…いるだけだったら」

〈トイレ組〉

シオン「トイレ我慢してる時に罰受けるなんて…もー!」

スバル「まあまあ…とりあえずさっさと終わらして戻るっすよ」

シオン「うん、そだね」

トイレの中に入るとなにやら声が聞こえてくる

???「…では歌いながら終わりたいと思います」

シオン「これたまきくんじゃない?」

スバル「確かにそうっすね、なんだろ?歌のリクエストとか?」

たまき「それでは聞いてください

V t u b e r 脱○シリーズ

配信中に出くしたら♪

V t u b e r 生活終るわるナリ♪」

シオン・スバル「ちよつとおおおおお  
!!!!!  
w w w」

デデーン

紫咲、大空OUT!

〈休憩室組〉

デデーン

紫咲、大空OUT!

【「トイレで何が起こっているんだろう…」】

ぺこら「ちよつと様子見に行つて来るぺこ…」

トワ「ぺこらちゃん気を付けてね?」

ぺこらが部屋を出るのを確認した2人は

ミオ「トワちゃんはいかないの?」

トワ「まあ見に行つたら間違いなく飛び火してくるし」

ミオ「だよね〜」

と、口にしながからお茶を飲んでくつろいでいた

〈トイレ組〉

ペこら「2人とも大丈夫ペこ？」

スバル「まあ…一応…」

シオン「まあ用足しできたし戻ろうか…」

そう言つて3人がトイレから出ると

たまき「おつす、おつかれ」

たまきが男子トイレから出てきた

「専用トイレの意味は!? w w w」

デデーン

紫咲、大空OUT！

スパーン！スパーン！

ぺこら【危なかった…いつもなら爆笑してたぺこ…】

トイレに行った3人が戻るとチャイムが鳴り

スピーカーから音が漏れ始める

トワ「ん？なんだろう…？館内放送…？」

メル【皆さん…こんにちは…】

ちよこ【こちら…合宿所館内放送です…】

スピーカーから聞こえたのはホロライブ所属の夜空メルと癒月ちよこの声  
どうやら2人が館内放送を担当しているようなのだが



なぜかASMR風

ぺこら「なんで館内放送でささやいてるぺこ…」

メル「では…まずは呼び出しからです…」

犬山たまきさん…織田信姫さんがお呼びです…

はやくこないと

お♡し♡お♡き

だそうです…」

「「「ぬふふw」」」

デデーン

全員OUT!

トワ「これだめwwwこんなのが館内で流れてたらむず痒いwww」

スバル「んがあああwww」

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

放送はなおも続く

ちよこ「続きまして…」

定 時 連 絡 っ??ス」

スバル「ちよこ先生!!!??ス」

「「wwwwwwwww!!」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

スバル「みんなスバルのまねすれば笑うと思つてないスカ!」

シオン「まあそれで笑つちやつてるんだから通用しちやつてるんだよ…」

スバル「なんか悔しいっス…」  
ちよこ「んんうん…」

ごみを捨てるときは

分別にご協力ください

ぶ ん べ つ

にね…」

トワ「アツハアw」

ぺこら「ぬふっんw」

デデーん

常闇、兎田OUT！

スパーン！スパーン！

ちよこ【さて、メル様】

メル【はい、ちよこ先生】

二人はすううつと息を吸い込むと

ちよこ・メル【さぎなみの音】

スバル「もう嫌だああああああああwwwwww」

「wwwwwwwwwwwwwww」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

メル【以上で館内放送を終わります…】

ちよこ【皆様この後もよい一日でありますように…】

スピーカーの音が途切れたのを確認し全員が肩の荷を下ろす

ミオ「まさかの方向から来たね…」

ぺこら「館内放送は盲点だったぺこ…」

スバル「もう…ASMR怖い…」

館内放送による奇襲は終わった

が、まだこの企画が終わるわけではない  
彼女たちの受難は続く

## 絶対に笑ってはいけない説明会

同日 16:45

5人のある休憩室にフブキが入室する

フブキ「はいはい、みんなおるかね?!?今からこの合宿所に新しい機材の導入をするからその説明会にみんなにも来てもらおうよ!」

ミオ「え：ウチ等明日の朝までしかいないのに：?」

シオン「つまりそういうことだよね：」

5人はすでに察していた

この説明会が普通でないことに

澁々立ち上がり、休憩室をあとにする

## 〈会議室〉

フブキ「んじやこつちの席に座っててねえ〜」

トワ「新しい機材ってなんなんだろ…?」

すると会議室の壇上に見覚えのある人物が現れる

スバル「あ、そら先輩とえーちゃんっス!」

壇上上がったのは合宿所の管理人であるときのそらとホロライブのスタッフである友人A

A「皆様、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます」

そら「明日から本施設に導入する新しい機材についての説明を、こちらの友人Aの方からさせていただきます」

えーちゃん、お願いね」

A「はい、では…こちらが、この合宿所に新たに実装する

最新鋭AI RBK-3です」

バツつとかけられた布が外されると

【こうせいのうAI RBK-3】

と、油性ペンで書かれた段ボールから頭だけ出た状態のロボ子さんが見れる

トワ「ロボ子てんばい!? www」

「「wwwwww」」

デデーン

全員OUT!

スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!スパーン!

A「こちらのAIは、あらゆるデータをラーニングしています

どんな質問であろうが完璧に答えることが出来ます

どなたでも構いません、何か質問をしてみてください」



そら「では、今日研修に来てるその5人！質問は？」

「【【【そう来たか……！】】】」

トワ「じゃ、じゃあ…この合宿所の管理人さんの名前は？」  
するとロボ子は顔を上げ

ロボ子「びびび、それは、ときのそら、さんです、びびび」

おおと説明を受けていた人たちが歓声をあげる

シオン「じゃあ…日本の初代総理大臣は？」

ロボ子「びびび、よく、わかりません」

シオン「……日本の初代総理大臣は？」

ロボ子「びびび、よく、わかりません」

シオン「日本の！初代！総理大臣は!？」

ロボ子「びびび、わっかんねーよ」

急に回答が雑になった

トワ・ミオ「「ふうんwww」」

AIが急に雑な対応をしたことに2人が噴き出す

デデー

常闇、大神OUT！

スパーン！スパーン！

ぺこら「じゃ、じゃあ…ホロライブで一番かわいいのは？」

会場が静まる

そしてロボ子が口を開く

ロボ子「…そりゃあボクでしょお〜」

「「「急に素だ！w w w」」」

デアーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

スバル「えつと…じゃあ…この5人で一番好きなメンバーは!?!」

「「「え？それ聞くの？」」」

スバル「え…？なんかやばかったつすか…？」

今後の活動も関わってくるようなえぐい質問をサラッとぶち込むスバル



ロボ子は少し考えると

ロボ子「びびび、正直、もっとみんなとコントみたいな絡みをしたかった、びびび」

「「「めっちゃ欲しがりだ！wwww」」」

デデーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

A「今お見せしましたように、どんな質問へも完璧な回答をできる最新鋭AIです！」  
「「「いや、それはないでしょ」」」

それら「と、いうわけで説明会は以上になりまゝす！皆さん解散してください！」  
説明を受けていた人々が続々と会議室をあとにする

フブキ「さーて、じゃあまた休憩室に戻ろ〜！」

スバル「ロボ子さんもなかなかの強敵だったっスね…」

トワ「まさか段ボールに入って出てくるとは思わなかったけどね…」

ロボ子さんという異色な刺客の猛攻を乗り越えた5人

だが、夜は

まだ始まったばかりだ

# 絶対に笑ってはいけない笑い袋

同日 18:30

5人は説明会から戻り、再び休憩室でくつろいでいた  
シオン「なんもない時間ってこんなに幸せだとはなあ…」

スバル「もうくたくたっスよ…」

ぺこら「ぺこーら油断したら寝るまであるぺこ…」

メンバーの随所に疲労が見え始めた

トワ「やつと12時間過だもんね…」

ミオ「まあ…さすがにウチもしんどくなってきた…」

「「「「はあ…」」」」

全員が疲れた表情でため息をつく

するとミオがあるものに気づく

ミオ「あれ？こんなさつきあつたつけ？」

休憩室の棚に見覚えのないボタン

シオン「ボタンつて時点ですでにいやな予感しかない…」

スバル「でも企画である以上は拾ってかないと…」

ミオ「…だよねえ…」

一回テーブルの上にボタンを置き

ミオ「じゃあ…押すよ」

「「…ゴクリ」」

ポチッ

ミオがボタンを押す

すると

???  
【ペーこぺこぺこwww】

ロッカーの中からぺこらの笑い声が響く

デーン

兎田OUT!

ぺこら「えっ?えっ!?ぺこーら笑ってないぺこだよ!」

スパーン!

ぺこら「みぎやあああああああ!」

スバル「ど、どういふことっすか!」

スバルがロッカーを開けると

中には南京錠のかけられたケースと中には5人の顔の書かれた袋が入っていた  
シオン「まさか…これから声が出るとアウトになるってこと!」

ミオ「ボタン押すとランダムに笑い袋が鳴るってこと!」  
すると休憩室の扉が開く



「すいせい」「全員動くな！ホロライブ警察だ！」

現れたのはホロライブ所属の星街すいせいなぜか刑事姿だ

「「「すいちゃん!? w w w」」」

デブーン

全員OUT！

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

すいせい「わがホロライブ警察に危険物があると通報があった！そのボタンがそう  
だ、証拠として回収させてもらおうぞ！」

すいせい「がそういうと、ミオからボタンを奪う

ミオ「あつ！ちよつとすいちゃん!？」

すいせい「しつかし、これはいつたいたいなんだ？」

すいせいはボタンを一回見回すと

ポチッ

ボタンを押した

シオン【ウツヒツヒツヒツヒ W W W】

デデー

紫咲 O U T !

シオン「すいちゃんんんんんんん！」

スバル「んっふhっふ W W W」

デデー

大空 O U T !

スパーン！スパーン！

すいせい「ん？このボタンがどうかしたのかい」

ポチッ

ぺこら【ペーこぺこぺこぺこ W W W】

デデー

兎田 O U T !

ぺこら「あああああああああああああああ！やめるぺこおおおおおおお！！」  
スパーン！

ぺこら「ぴぎいいいい！！」

すいせい「真剣な表情で話しながらボタンを押す

こころ「なしかすいせいはニヤニヤしているようにも見える

ミオ「早く鍵探さなきゃ！このままじゃ全員のお尻が死ぬ！」

トワ「引き出しとか全部開けてみよう！」

すいせい「おく精が出るね〜」

ポチツ

トワ【ツハアW】

ポチツ

ミオ【アツハツハツハツハW W W】

デデーン

常闇、大神OUT！

トワ・ミオ「なんでピンポイントで?！」

スパーン！スパーン！

まるで狙いすましたかのように罰が執行される2人

だが

トワ「ぐぬぬ、ひるんでられない！鍵の手掛かりは!?」

ミオ「どこ!どこにあるの!?!」

ぺこら「早く見つけるぺこお!」

一刻も早くこの地獄から脱するため5人全員が部屋を大搜索する  
すいせい「みんな必死で可愛いねえ」

ポチツ

ぺこら【ペーこぺこぺこwww】

デデーン

兎田OUT!

ぺこら「みんな!ぺこーらに構わず鍵を探すぺこ!

しゃーーーい!」

スパーン！

ぺこら「あんぎやあああああああ！」

この短時間で何回も尻をしばかれていますぺこら

ランダムのはずなのになぜかぺこらばかり笑い袋の犠牲となっているのは多分気のせいであろう

ミオ「スバル！そっちあつた!?!」

スバル「こつちにはないっス！トワちゃんの方は？」

トワ「ごめん！こつちにもない！シオン先輩の方どうですか!?!」

シオン「こつちもダメ！」

すいせい「いや、みんな協力してる姿は美しいなあ」

ポチツ

シオン【ウツヒツヒツヒツヒwww】

デデーン

紫咲OUT！

シオン「んもおおおお！もうやだあああああ！」

スパーン！

シオン「いっだあああああああ！」

シオンが罰の執行で笑い袋のあるロッカーに近づく  
シオン 「もお…」

つて…あれ？ 鍵あるじゃん…」

「「「え？」」」

全員が言葉を失い、シオンに注目する

シオン 「灯台下暗しってやつだね…ロッカーの扉の裏にあった…」

「「「むきいいいいいいいい！！」」」

すいせい 「いや〜！ 目的のものが見つかって何より！」

ポチツ

すいせい 「あwいつけねw」

ぺこら 【ペ〜こぺこぺこぺこw w w】

デデーン

兎田OUT!

ぺこら「いや今のはひどいぺこだよ!!? 鍵見つけたなら終わりでいいぺこじゃん!」  
ぺこらの叫びも空しく刑は執行される

スパーン!

すいせい「いや〜! ごめんね! つい:ね?」

シオン「さっさとこれ開けて終わりにしちゃお!」

シオンがカギを開け、中の笑い袋を取り出す

すると部屋にフブキが入ってきて

フブキ「いや〜失敬失敬、試作品の笑い袋をしまったままだったよ〜めんごめんご〜

☆

ぺこら「フブキ先輩もうちよつと悪びれてくださいぺこよお! なんでぺこーらばっかりい!」

すいせい「ふむふむ、無事事件は解決したようだね!」

「「「いや、なんもしてなかったでしょ!」」」

まるで自分も頑張ったかのように言っているがすいちゃんはボタン連打していただけである

すいせいと笑い袋の襲撃で大きなダメージを負った5人  
だが夜はまだ始まったばかりなのである



## 絶対に笑ってはいけない中で起きた小さな事件

同日 19:30

笑い袋による罰の強制執行地獄を脱した5人  
すでに疲労はピークに達しようとしていた。

ペこら「さっきのはさすがに堪えたぺこ……」

トワ「ペこらちゃんめつちや罰執行されてたもんね……」

ミオ「もうちよつとだけ頑張ろう……もうすぐ夜が来るから……」

そんな話をしていると休憩室のドアが開き

中に入ってきたのは

フレア「あれ？ここ5人の休憩室になってたんだね」

ホロライブ3期生、不知火フレアだ

ぺこら「フレア？どうしたぺこ？」

フレア「お昼くらいにこの部屋に来た時にちよつと忘れ物をしてさそれを探しに来ただけ……」

まあみんなの休憩室になってるなら邪魔になっちゃうね」

フレアは少し考えたあと

フレア「なんもないけど……これ、みんなに差し入れ！んじや、この後もがんばってね」

フレアは肩にかけていたクーラーボックス置いて部屋を出て行ってしまった

ぺこら「あ、フレア行っちゃったぺこ」

スバル「やけにあっさりなのは気になるっすけど、差し入れの中身チェックっすよ！」と、スバルがクーラーボックスを開けると

マグロの切り身（冷凍）が入っていた

スバル「いやそうじゃないだろおおおおお!!!  
wwww」

デデー

兎田、大空OUT!

スパーン!スパーン!

ミオ「他に比べて薄味だけど刺客だったね…」

トワ「むしろこの単発ネタで終わると思えないのがこの企画の怖いところですよね」

シオン「まあでもさ、この企画もさつきみたいな強硬手段なかったら怖いものなくなってきたかも!」

と、シオンが余裕を見せると

ピンポンパンポーン

チャイムが鳴り、部屋のスピーカーから声が聞こえてきた

ちよこ【館内の皆様へ緊急招集の連絡です】  
メル【皆さん、至急大ホールへ集合願います】

放送が切れると同時にフブキが中に入ってくる

フブキ「みんな！緊急事態だ！この施設内で窃盗事件が起きたんだって！

今この施設内にいるすべての人を大ホールに集めてるからみんなもホールに行くよ

！」

スバル「窃盗って…随分物騒っスねえ…」

トワ「とりあえず行こうか…」

## 〈大ホール〉

イスが並べられた大ホール、照明は暗くなり

ステージに照明が集中している

トワ「なんか今までと雰囲気違うね…」

ミオ「うん、なんていうか…ほんとにピリピリとした空気って感じがする…」  
フブキに連れられ最前列の椅子に座る5人

そら「みなさん、緊急の招集に答えていただきありがとうございます  
本施設で窃盗が起きたこと…非常に遺憾であります…」

まずは事件について刑事さんから説明があります

刑事さんお願いします」

すると、星街すいせい壇上に上がる

すいせい「みなさん、このような事件が起き、非常に残念です

まず事件の概要についてですが

窃盗被害者を受けたのは不知火フレアさん

この施設には、食堂の白銀ノエルさんを訪ね、こちらに来ていました」

5人は顔を見合わず

フレアはつい先ほど自分たちの休憩室に来ていたからだ

すいせいは続ける

すいせい「彼女はノエルさんからとあるプレゼントを受け取り

そのプレゼントを持ってこの施設内の部屋に置きました

その後、ノエルさんとともに食事のため外出しました

そして、先ほど部屋へ戻ったときにはすでにプレゼントがなくなっていたというので

す

そのプレゼントというのは

ケーキだぞ!!!!!!  
 「……」

ぺこら「……………」

「……んぬうwwww」

デデーン!!!!!!

常闇、紫咲、大空、大神OUT!  
 !!!!

皆様 この状況がお判りだろうか……

そう、兎田ぺこらは引き出しから出て来たケーキを食べていた  
 なにも疑うことなく……

※11話参照

スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

ぺこら「……」

トワ「ちょっと…これってやばいのでは…？」

ミオ「うん、これ間違いないくぺこらのことだもんね」

すいせい「ただ1つわかっていることは、その部屋を今日使っていたものが5名いるということだ」

ぺこら「…」

ぺこらの表情が固まる

すいせい「わたしの集めた情報では容疑者となるのは

最前列にいる

そこの5にんだあああああ！」

ぺこら「…っ！」

ぺこらの表情が動揺を押し殺そうとすごく不細工になる

「「「んんんんふwwww」」」

デデーン

常闇、紫咲、大空、大神OUT！



スパーン！スパーン！スパーン！スパーン！

すいせいが増上から降り

まずはトワの前に立つ

すいせい「では、1人1人質問をさせていただくとしましょう

常闇トワさん

あなたはケーキを食べた、もしくは盗みましたか？」

トワ「…いいえ」

トワのまつすぐな目にすいせいは

すいせい「疑ってすいませんでした」

一礼すると次はシオンの前に立つ

すいせい「紫咲シオンさん

あなたはケーキを食べた、もしくは盗みましたか？」

シオン「いいえ、シオンはそんなことしません」

シオンもまつすぐすいせいを見つめ答える

すいせい「疑ってすいませんでした」



それともあなたが食べたんですか？

それとも本当は：あなたが食べたんですか？」

ぺこら「全部同じ選択肢ぺこお！」

トワ「んふふwww」

ミオ「アツハア！www」

デデー

常闇、大神OUT！

スパーン！スパーン！

ぺこら「：ごめんなさい：食べましたぺこ：」

すいせい「自ら名乗り出るとは：潔い犯人だ」

ぺこら「大分無理やりだったぺこだよ！」

すいせい「犯人が名乗り出た！この場で犯人への罰を執行する！」

ぺこら「ちよつとは話を聞くぺこおおおおおおおおおおおん」

ぺこらはすいせいに引つ張られ壇上へと連れていかれる

すいせい「兎田ぺこら、想いあう2人の仲を引き裂くような卑劣な行為

到底許されるものではない！」

!!!!!!

ぺこら「待つぺこ！こっちにだつて反論があるぺこよ！」

すいせい「ほう？言ってみるがいい」

ぺこらが引つ掛かつていた点

それはテーブルに置いてたプレゼントがなぜ引き出しに入っていたのか  
今まで自分たちの動きを見れば明らかだった

ぺこら「確かにケーキは食べたぺこ！」

でもそもそも！引き出しに入れた真犯人がいるぺこ！

それはぺこらたちの休憩室にいたずらを仕掛けた湊あくあ先輩ぺこ！」

すいせい「…ほう」

すいせいは近くにいた警備員に耳打ちすると

湊あくあが警備員に連れられやってくる

あくあ「ハツハツハツハツハツ…」

あくあは自分の危機を感じとつたのか過呼吸気味になっていた

すいせい「さきほどあなたがケーキを引き出しに隠したという新たな事実が判明した

が…それは本当ですか？」





小さなことから始まった事件も無事とは言えないが解決した  
5人の戦いも少しづつ終わりへと近づいていたのだった

# 絶対に驚いてはいけない肝試しの始まり

同日 21:00

緊急招集が終わり5人は休憩室に戻っていた

ミオ「ペこらちゃん大丈夫？」

ペこら「ノエルめっちゃ全力だったぺこ…」

演技のはずなのに凄く個人的な感情ももってた気がするぺこ…」

トワ「まさかあくあ先輩まで巻き込まれると思わなかったけどね…」

休憩室にたどり着き、ドアを開く

するとテーブルに置手紙があるのに気づく

シオン「んお？なんだろこれ？」

スバル「もう話なってわかってますし読んでみるっスよ

えつと…

「フフフ…諸君…きげんよう…黒上フブキだ…」

今日は一日お疲れ様だったねえ…



笑い疲れたらどう？ そうだろう？

そこでだ、私から一つプレゼントだ

この後この合宿所内で肝試しをする

その間は笑ってもいいが絶対に驚いてはいけないぞ？

それではな

ククク：

PS. このメッセージを読んでから部屋を出たら肝試しスタートだ  
だ、そうっす」

全員の顔色が変わる

【笑っては】 いいけど 【驚いては】 いけない

その意味を理解したからである

トワ 「肝試し：」

ぺこら 「やつば嫌なことは続くっていうけどほんとぺこね：」

ミオ 「ドアを出たらそっからは肝試し：」

全員ここまで笑わないために色々手を尽くしてきたが

そのスイッチを切り替えなければならぬ



トワ「…ごめん、取り乱した…」

ぺこら「まあみんな疲れてるし…いきなり肝試しって言われたら動揺もするぺこだ  
よ」

ミオ「とりあえずウチがトワちゃんについてるからさ」

3人は先にスタートしてて、あとで必ず追いかけるから」

ミオの提案もあり、

シオン、ぺこら、スバル

トワ、ミオ

の2チームに分かれ、

肝試しへ出発することとなった

ぺこら「んじゃ、先行ってるぺこら」

スバル「おっしや！行くツスよお！」

シオン「2人ともあとでねえ」

3人は意気揚々とドアを開ける

すると

バン!

「わあああああああ!」

ドアを開けると同時に風船の割れる音で3人が一斉に飛び上がる

スバル「お、おもつてた以上にベタな奴が来て普通にビビってしまつたス…」

シオン「び、びつくりしただけ!ビビってないから!」

ペこら「いや、めっちゃビビってたペこ…」

3人は懐中電灯を手に廊下を歩く

肝試しのためなのか館内の電機は消えていて懐中電灯がないとまともに視認できないほどにだ

スバル「つてかなんで二人ともスバルのかげに隠れてるっすか…」

ペこら「いや、なんとというか…念のためペこ…」

シオン「いや、別にスバルちゃんを盾にしてるわけじゃないんだよ?」

スバル「まあ…別にいいんですけど…」

スバルが前に振り向いた瞬間

へキヤアアアアアアアアアアアアアアアア!

「うっお、びっくりしたあ」「うわああああああああああああああああああああ  
!?????  
」

ぺこらとシオンは後ずさりして柱の裏に隠れる

スバル「これ…：すげー前途多難な気がしてきたっス…」

〈トワ、ミオ組〉

ミオ「トワちゃん落ち着いた?」

トワ「とりあえずはね…」

ミオ「大丈夫かな3人とも…」

その時だ

ドアが突然開き

マリン「はあいお二人さーん!ちよつと船長と来てもらいますよお!」

トワ・ミオ「船長!」

マリンが指を鳴らすと数人の黒装束が2人を縛り始める

ミオ「ちよ！なにこれえ!? シャレになってないんだけど!？」

トワ「…」

ミオ「トワちゃん大丈夫!？」

気絶してるや…」

マリン「ぬふふふwwwwたつぷり楽しみましようね」

夜は長いですから」

笑ってはいけない空間を抜け出して

彼女たちを襲うのは

新たな受難

# 絶対に笑ってはいけない時間で芽生えた何か

突然現れたマリンと黒装束にさらわれたトワとミオ

マリンは2人を別室の椅子に拘束する

マリン「ごめんなさいね2人とも、この肝試しにおける船長のお仕事は分断されたメ  
ンバーの1組をここに連れてくることだったんですよ」

ミオ「で、なんで椅子に縛られてるの？」

マリン「先に休憩室を出た3人は2人を救いにここに来るってえわけですよ」  
ミオはなるほどと納得する

黒装束が現れたショックで気絶していたトワも目を覚ます

トワ「ん…？あれ!?なにこれ!?船長!なんなんですかこれえ!」

マリン「いや〜!恐怖に震えてるときのトワ様最高にかわいいですね〜!

ほんと…食べちゃいたいくらいに…」

トワ「ヒツ…!?!」

マリンの言動にトワは表情が引きつり、目からは涙がこぼれそうになる

マリン「あー！待っててください！泣かないでくださいトワさん！演技！演技ですから

!!」

ミオ「はあ…なんともしまらない感じが船長つて感じる…」

マリン「と、とにかく！助けは心配しなくても来ますから…2人はおとなしくしててくださいね？」

それじゃあ出航〜！」

そういうとマリンは部屋から出て行ったのだった

〈シオン・ペンコら・スバル組〉

3人は館内の移動を続けていた







暗がりから突然の叫びに2人は全力疾走で逃げる

スバル「ちよつと2人とも!?!スバル置いていかないで欲しいっスよ!」

スバルは2人に1礼するとシオンとペこらを追いかけていく

ちよこ「ちよこ達テトリスやってただけだったんですけどね?」

メル「一体ナニを想像したんでしょうね?」

シオン・ペこら「ぜえぜえ…」

スバル「はあ…はあ…やつと追いついたっス…」

もう!2人とも結局中の様子ちやんと見れなかったじやないっスか!

ペこら「も、もうしわけなかったぺこ…」

シオン「ごめん…ちよつと取り乱した…」

フブキ「まったく君たちは落ち着きがないねえ」

スバル「まったくっすよ」

スバルがフブキの言葉にうんうんと頷く

おや？

スバル「つて!?フブキ先輩!」

シオン「い、いつのまに…」

あまりにも自然に会話に入ってくるため3人はフブキがいることに気づけなかった

フブキ「そんなことより君たち!ミオとトワちゃんが何者かに誘拐された!」

「「え?」」

フブキ「この館内のどこかの部屋にいるはずだ!なんとしても探し出すんだ!

怪しい部屋にマーキングした館内図を預けるから君たちの手で救出してくれたまえ

!

それでは!」

そう言い残すとフブキは闇の中へと消えていった

シオン「えっと…マーキングされてるのは3つか…」

ぺこら「2人は無事ぺこ…？」

スバル「こりやあびびつてらんないっすよ、ミオちゃんはともかくトワちゃんはあの様子だったしあんまゆつくりはできないっす！」

3人は館内図を頼りに歩みを進めるのだった

### 〈トワ・ミオ組〉

拘束されたまま部屋に取り残された2人

ミオはトワに向け話を切り出す

ミオ「トワちゃん…今回の企画さ、出演依頼来た時どう思った？」

同期いない中での長時間企画とか不安じゃなかった？」

トワは今回の企画でも一番キヤリアが短い中での参加

ミオは企画開始時からちよくちよく気にかけていたのだ

トワはミオの問いに対し

トワ「正直すっごく不安でした」

それこそコラボしたことない先輩たちばっかりで

トワが迷惑かけちゃうんじゃないかなって思って…

だけど今は、参加してよかったなって思ってます！

長い時間を一緒に過ごせて楽しかったです！」

さつきまで不安そうな表情だったトワは笑顔でミオの問いに答える

ミオはそれを見て一瞬あつげにとられた表情になったが

ミオ「…そっか、ならよかった」

3人、早く来るといいね」

トワ「ですね、きつとすぐ来てくれますよ」

ミオ「ウチが杞憂になるようなことじゃなかったな…トワちゃんも楽しめたようですよ  
かった…」

嫌だ嫌だで始まったこの企画の中で

5人には確かに何かが芽生えつつあった

## 絶対に驚いてはいけないマーキングポイント

フブキからトワとミオの誘拐を聞き

3人は館内図のマーキングされた部屋をめぐるついでに

シオン「えつと……ここが1個目のマーキング場所だよね」

スバル「ここは……演芸ホール？」

ペこら「んじゃ……開けるペこよ？」

ペこらがドアに手をかけ

一気に扉を開ける

すると中にいたのは

るしあ「この浮気者おおおおおおお  
!!!」

ノエル「この泥棒猫お!!!」

マリリン「ストップストップ!るしあ!それはほんとに危ないから!それ小道具じゃな

くてほんとの包丁じゃないですか!!?!ノエルもメイスしまつてくたさい!!!それはただ死ぬじやすまないじやないですかあ!!!」

フレア「あはははは…」

ホロライブ3期生の面々

しかし何というか…

【「完全に昼ドラなだけど!?!」】

マリリン「2人とも落ち着いて!フレアと食事の約束しただけじゃないですか!」  
るしあ「マリリンはいつもいつもそうやって!るしあの事なんてどうでもいいんでしよう!?!」

ノエル「待っててねフレア、この泥棒猫にちよつとお仕置きしなきゃ…」

フレア【2人とも演技ってこと忘れてない?】

マリリン「ちよ!待って!死ぬ!ほんとに死んじやう!ぺこら助けてええええ!!!」

マリリンがぺこらの方へと走ってきて後ろに隠れる

ぺこら「ちよ!?!こんな修羅場に巻き込むんじやねーぺこだよ!?!」

るしあ「ぺこら…そこどいて…マリリン殺せない…」

ノエル「ぺこら?ぺこらも団長の邪魔するの?」





〈トワ・ミオ組〉

ぺこら「ぴぎやあああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

トワ・ミオ「!?!」

突然響いた絶叫に2人が反応する

トワ「今のつて…ぺこらちゃん?」

ミオ「だね、案外近くに來てるのかもしれないね」

トワ「外は大変なことになってるんだろうなあ」

部屋の外での騒ぎに気付いた2人だが

まさかそれが3期生の昼ドラのような風景とは思わないのであった

〈シオン・スバル・ぺこら組〉

ぺこら「2人とも…ほんとこの企画終わったらおぼえてくださいぺこ…」

シオン「あれは3期生流のプロレスみたいなもんじゃないの?」

スバル「まあ見慣れた光景っすよね？」

ぺこら「ガチンコに包丁とメイス持ち出すプロレスがあつてたまるかぺこお！」  
そうこう言っている次のマーキングポイントにつく

ぺこら「ここはなんにも書いてない部屋ぺこ…」

シオン「でも、刺客がいるのは間違いない」

スバル「トワちゃんとミオちゃんのためにも行くしかないっすよ」

そう言つて、スバルはドアを開ける

フブキ「おいおいおいおい？」

ココ「さっさと吐いたほうが楽になりますよ？」

わため「すいません…ほんとに知らないんです…」

なぜかわためを拷問するココとフブキがいた

【いやどういふ状況!?!】

ココ「ウチのもんから盗んだ朝ココ関連のブツを出してもらおうか？」

わため「あれが盗品だつて知らなかったんだよ！」

運ぶのを頼まれただけでもん！

わためは悪く「いや、そういうのいいから早く出すんだよ！」  
わためが決まり文句を言おうとするもココとフブキに遮られる

スバル「ずっと思ってたつすけどこの肝試し怖いのがベクトル間違えてないっすか？」  
シオン「あ、シオンもそれ思ってた…」

ぺこら「まあここの部屋も違ったぺこだし…次のマーキングポイントに行くぺこ…」

3人は必要以上に触れると自分たちが痛い目を見ると思ったのか  
ドアをそっ閉じする

スバル「なんにしても次が最後の部屋っスね」

ぺこら「トワちゃんもミオ先輩はきつとそこにいるぺこ！」

シオン「いこ！今度こそ2人のとこに！」

5人の物語の終わり

それはもう、目の前に近づいていた

## 絶対に笑ってはいけないう物語の終章

最後のマーキングポイントへとたどり着いた3人

スバル「このマーキングが間違っただけなら、ココに2人がいるんすね……」

シオン「ミオちゃん！ トワちゃん！ 中にいるの？！」

ペこら「いるなら返事するべこ〜！」

まずは扉越しに2人が本当にいるかを確認する

トワ「あ！ シオンちゃん！ ペこらちゃん！ ってことはスバルちゃんも一緒!?」

ミオ「よかったあ！ 中に2人もいるよ！ ただ椅子に縛られて動けないの！ 早くほ  
どいてえ！」

ペこら「了解ペこ！」

3人はドアを開け中に入る

トワ「ごめんなさい……3人が出て行ったあとに黒装束の人たちにここに連れてこられ  
て……」

スバル「トワちゃん、謝ることなんかないっすよ

スバル達はホロライブの先輩後輩

先輩が後輩助けるのは当然っス」

そう言つてスバルはトワの拘束を解く

ミオ「3人ともありがとう、肝試し中だったのにこんなことになつちやつて…」

シオン「まあ…あれが肝試しかどうかは置いて…」

ぺこら「ここまで長時間企画一緒に乗り切つたメンバー見捨てたりしないぺこ！」

ミオの拘束も解け

5人が部屋を出ようとすると

バタン！

カチャリ

すごい勢いでドアが閉まり、鍵が閉められる

「「「え!?!」「」」」

5人は状況が呑み込めない

すると

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

何やら異音がするのがわかつた

5人が周りを見回すが部屋が揺れているように感じた

ミオ「なに!? なにこれ!?!」



そう書いてあった

シオン「ここに何かをはめ込むってこと？」

トワ「でも…この部屋に何かはめ込むものなんて…」

スバル「…いや、ひとつだけあるっすよ…」

みんな、おじおじから渡された封筒…持つてるっすか？」

全員が舞元から渡された封筒を取りだし、

その場でひっくり返す

中から出て来たのは5枚のパネル

【（（（（これって…！））））】

5人は顔を見合わせ、頷く

パネルを手に取り枠へとはめていく

天井はどんどんと迫っていた

スバル「いくっすよ！せーの！」





そんな5人をフブキも陰から見守っていたが  
フブキ「ん〜！ほんとにだったら驚いてはいけない時間が終わってるからお仕置きなん  
だけど：

本人たちがえてえならOKです！」

翌日 5：45

あの後5人は倒れるように眠りにつき

そして朝を迎えた

合宿場の敷地から出ればもうこの笑ってはいけない時間ともおさらばだ

トワ「なんというか：長い長い1日でしたね…」

シオン「でもさ！シオンはすごい楽しかったよ！」

ぺこら「散々な目にもあったぺこだけどね…」



フブキ「おっほん！ 厳しい研修の中、5人ともよく頑張りました！

多くの刺客の猛攻をよく耐え抜きました！

あそこの敷地を出た瞬間、君たちの今回の企画は終了だ！

本当によく頑張った!!!」

フブキを加え、6人歩みだし

敷地を跨いだ

「「「「終わったあああああああああああ!!!」」」」

5人は過酷な企画の終了に思わず叫び、抱き合う

これは

止まらないバーチャルアイドル達の物語の

ほんの一部でしかない

彼女たち

いや、ホロライブの物語は

まだまだ続くのである

Thank you for reading until now:

絶対に笑ってはいけないホロライブ

罰 執行回数

常闇トワ 76回

紫咲シオン 75回

兎田ぺこら 77回

大空スバル 85回  
大神ミオ 73回